

沖

2
2016

俳句雑誌【沖】



そもそもは

能村 研三

二月の旅

私の句に

北塞ぐより深まりし北指向

という句がある。若い頃、仕事の合間を縫って、よくひとり旅をした。行先はほとんどが、東北など北を指すことが多かった。しかも、二月の一番寒い時期を選んで出かけていた。行先をしっかりと定めて行く旅でなく、しばらく一人になって俳句を考えることが好きだった。

役所では、まだ役付きでなかった時代、上司には「俳句を作ってきたす」などと言えるはずがなく、単なる旅行ということで休暇をもらったことを覚えている。

その頃は、林翔先生が編集長をしていた時期で、自ら進んで俳句の特別作品を寄稿し、掲載してもらったことがある。同世代の人たちも、

風花の遮断機に待つ鼻がしら

ちやんちやんこ着て筆まめになりしかな

駅の名を見る狩人が降りてより

寒の水呷り口火を切りけり

獵期来る嗜み越えの茶碗酒

抄らぬままにて師走日和なり

年迎ふ人間だけが無理をして

積ん読を崩しては積み年行けり

そもそもは煤逃げなりし千葉笑

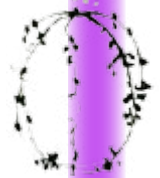
無理強ひはしてはならぬと楯を焚く

競って特別作品を出していた時代で、若手の指導に当たっていたのだ。今瀬剛一さんからは、百句を作る目標を決めて、手帳に番号を打って、それを全部埋めるくらいの気持で行ってこなければ駄目だと発破をかけた。

東北では、まだ新幹線が開通していない時代、夜行列車で遠野を訪ねたこともあり、先輩の大畑善昭さんにお世話になった。他にも、雪の琵琶湖、余呉などに行ったことや、雪を被った吉野の奥千本まで歩いたことも思い出に残っている。

最近では、自由気ままな旅行が来ず、スケジュールをこなす旅ばかりで、昔のような旅がいつかしたいと思っはいるが、なかなか難しいのかも知れない。

蒼茫集



竜の玉 細川洋子

竜の玉とくに子育て体あたり
見るほどに十月桜増えてくる
磨ぎ水に貫ふ温もり冬霞
しみじみと残響ありし除夜の鐘
物持たぬ冬あをぞらの豊かさよ
鱒酒のほのほ妖しき容かな

日暮 安居正浩

鯛焼の尾にさびしさがついてゐる
歳晩や交響楽団町に来る
こひぶみを焼きそれからの冬支度
山茶花の白が日暮になれずをり

凧や居酒屋にまだ灯のつかぬ
死に際は紅ならむ綿虫は

耳語 千田百里

冬ぬくしとは屈強の五郎丸
耳語の女人に山茶花散るは散るは
枯葉舞ふひらひら自転くり返し
木枯の夜は鬼平の出番かな
我も一木凧を浴びながら
一葉忌拭ひしチョーク消え残り

刻印 辻美奈子

思春期に寒三日月を刻印す
凧や電波傷つけ合うてゐる

梳る音冬虹の消ゆるとき
始皇帝の不死の兵馬や冬霞
温顔は亀にもありぬ冬日向
青春の始まつてゐる白セータ―

菓 喰 森岡正作

宿の灯の明る過ぎたる菓喰
若狭路のしぐれて晴れてしぐれけり
英彦山も眠りぼた山深眠り
湯豆腐の男は無口よかりけり
黄門も越後屋もゐて鍋奉行
妙案も腹蔵もなき懐手

青きもの 矢崎すみ子

溶岩原は神の依代霜の花
青きものフォッサマグナの霜柱
走り根は森の動脈雪催
八ヶ岳初冠雪の地鳴きかな

山脈の雪の稜線日の万朶
をさなごを待つ花びらの目貼りかな

歳 月 荒井千佐代

種茄子に一日かぶさる怒濤音
權一本ただよつてゐる芒原
琴立てしままの歲月いわし雲
立冬の光と思ひ朝戸繰る
障子開け海を見せやる遠忌かな
冬桜黙して愛を深めけり

散紅葉 吉田政江

マザーツリー総てを見据ゑ冬に入る
鈴生りの林檎の裳裾津軽富士
大根引く思ひの外の拍子抜け
掃き寄せて焚くほどもなき散紅葉
枯れきつて小庭の広さ見直せり
生姜湯に噎せをり噂されてをり

野 生 甲州千草

野生とは白さと思ふ波の花
両手空つぽ水鳥に歩を合はす
電飾を前に師走の烏瓜
窓開けて道を訪ふなり葱の町
両開きの電車に飛び乗りし師走
注連飾る古き艶持つ工具箱

校内放送 林昭太郎

綿虫や瞬時に翳る日本海
みちのくはレール伝ひに冬が来る
鋤き返す土の香甘し雪来るか
ひとつ灯に一つの暮し冬銀河
菓子缶の撓みて開く冬日和
私語拾ふ校内放送冬あたたか

不断着 小松誠一

詳しくはWEBでといふ文化の日
银杏散る個々に光をまとひ散る

屈曲のミニマル・アート枯はちす
心にも不断着といふちやんちやんこ
止む無しと時雨宿りの縄のれん
里山の裾に柵引く冬霞

松の精 栃内和江

雪吊にしばし熟寝の松の精
風花のかなたが透けて光堂
僧正のお数珠を受けて冬ぬくし
天帝を信じ切つたる冬木の芽
乾びたる熊棚ひとつ大冬木
地吹雪に躍る蝦夷の血なりけり

家路 宮内とし子

ポインセチア提げて男の家路かな
十二月顔の重なるピカソの絵
神無月和紙の手紙に滲む文字
立冬や土間に使はぬ竈置き

潮風の磨く空あり千大根
太陽を放さぬままに银杏枯る

冬 日 差
梅村すみを

寝返りて夢に薫りぬ菊枕
いわし雲なぜか悲しいみすゞの詩
親も子も白息朝の保育園
うしろ手の身に添ふ齡冬日差
木枯しの街を歩めば難民めく
次の間の咳控へ目にひびきけり

石路明かり
望月晴美

静かなるくらしの庭や石路明かり
鴛鴦発ちしあと浮羽の二三枚
孤高とは手のとどかざる冬の月
寒波くる松の木肌はうろこ立ち
鳩消えしあと夕闇の無音界
烈風を来て山里の牡丹鍋

鴨の胸
大川ゆかり

ぬくめ酒本音と言ひてさうでなく
じやんけんのあいこが続き神の留守
固さうな柔らかさうな鴨の胸
ポタ山の青き輪郭冬うらら
冬ざれや森の香りのポプリ玉
諳んずる我がナンバーや風邪心地

嗶れ声
内山照久

一木を統べて孤高や木守柿
沖見張る灯台凜と冬の月
義士の日や糶に飛び交ふ嗶れ声
どの子にも秘めし才能冬木の芽
気がつけば老いの領域花八つ手
ひゆるひゆると風が泣き出す十二月

万年青の実

大畑善昭

良心のやうに色づき万年青の実
枯木立空の限りを星撒かれ
べたべたの初雪すでに草隠す
雪山の真闇や靈気ひしひしと
後ろより誰か蹤く雪娘かも
献納の寺の古俳句煤払ふ

絵画館

上谷昌憲

絵画館までの黄昏銀杏散る
水底の紅葉水面の紅葉かな
縫る水凭るる水も冬の滝
マイナバー山茶花梅雨を来りけり
右手に焼箸弓手に自撮棒
丸餅を焼くちちははの忌を忘じ

黄葉シャワー

藤原照子

枳の実や集落なべて水の音
唐松の黄葉シャワーや向ひ風

紅葉の一樹三彩否五彩
もみぢの情常磐木の知と照らし合ふ
知り合ひしころのときめき返り花
十八代当主独居や雪卸

返す力

田所節子

虫しぐれ満天の星濡れてをり
大花野光湧くかに水流れ
落葉踏みかさこそ返す力あり
木枯や明日へ輝く星の数
重さうな音たて鴨の着水す
落葉踏み自答は己れ責むことも

十二月

菅谷たけし

神無月座薬に貰ふ眠りかな
転院のふるさと道や冬紅葉
縮こまる心ほどけと冬の鳶
十二月テレビは故人流しをり
門松のミニリハビリの受付に
八つ手越し山茶花を越す今日の試歩

潮鳴集



晩節 金田誠子

カーテンを洗ひ十一月終る
反抗期ダウンジャケット膨らませ
冬ざるエアカーテンを抜けしより
晩節に色ありとせば石路の花
極月の雑踏見たく夜の街へ

馬関の夜 磯貝尚孝

木の葉ちる平家の墓に海の音
海峡に灯の色にじむ河豚の宿
鱈酒のぷんと鼻うつ馬関の夜
寒月や海を見下ろす露天風呂
短日を惜しむ長府の旅ごろも

純粹 峰崎成規

初志の裾やはり絡ぐる十二月
鮫鰯の原罪括る顎の鉤
純粹てふ形描かば六花
ラガーらの厚き胸板熱き息
人が人わづかに避けて日向ぼこ

握り艶 平松うさぎ

胸奥に灯る明るさ冬桜
ポインセチア部屋に一人にしておけぬ
東屋は美しき鳥籠実万両
地に落ちて一夜地に咲く寒椿
小春日やラケットにある握り艶

沖作品



能村研三選

マフラーを振るや飛び乗る離島便

長崎

田川美根子

産土の棄教殉教鷹渡る

鳥渡る古地図になぞる海岸線

木の楔噛み秋風の眼鏡橋

昏き空は画家の心象冬うらら

木枯しに夜半のこむらがへりかな

初氷水の記憶を曖昧に

その分は思慮深くなり木の葉髪

一途とは時に疎まし都鳥

剥製の眼光るや虎落笛

行く秋の富士の湧水しんしんと

地下茎の肥ゆる音する秋の夜

地軸には「ゆらぎ」あるとふ雁の棹

山茶花の散るちる風のなき午後を

電飾の木々のときめき十二月

千葉

坂本 徹

市川市

溝呂木信子

三浦坂のぼりつめれば檀の実

青焼きの古き間取り凶花八つ手

いつまでも揺るる戦後の泡立草

風冴えて「伊八の波」に海の音

神の留守マイナンバーの届きたる

冬の雷らくがんほると零れけり

杉の秀を掠める夕日雪ばんば

電波時計ひらりとすすむ霜夜かな

熟柿吸ふけものごとく唇濡らし

冬桜矜恃の白を通すかな

夕風の音の硬さや破芭蕉

着水に上手下手あり白鳥来

大杉の根方は濡れず初時雨

冬帽子脱ぎて白髪豊かなる

棧敷席の小倉言葉や冬あたたか

福島

佐川三枝子

千葉

竹内タカミ

小林 陽子

沖作品 15句選評

*
能村研三

木の 楔 噛み 秋 風 の 眼 鏡 橋 田川美根子

作者は長崎の方なので、市内中島川に架かる眼鏡橋は、普段から長崎の代表的な風景として親しんでおられるのだろう。この橋は日本最古のアーチ型石橋で、興福寺二代目住職黙子如定の作と言われ、川面に映った姿からその名がある。私も長崎を訪れるたびに眼鏡橋の美しさに魅了されている。三十数年前の長崎水害で橋の半分が流されたが、現在は綺麗に復元されている。こうしたアーチを描くには、匠の技が必要で、石と石の間は、木の楔を噛ませながら強度を保っているのだろう。作者もこのような仕掛けがあることを知って、ますますこの眼鏡橋のすばらしさを認識した。秋風が吹く頃の眼鏡橋は、石の重厚さを一層引き立ててくれる。

初 氷 水 の 記 憶 を 曖 昧 に 坂本 徹

今年は暖冬なので、まだ氷が張ったのを見ていないが、朝起きた時、庭の踵に氷が張っているのを見ることがある。その日の寒さによっても凍り方が違う。氷の筋目が浮き立つように凍ると分厚く叩いても割れないほどの凍り方もある。凍る前は当然水であつたわけだが、凍ることを予知していない水にとつてはその記憶も曖昧であつたに違いない。

地 軸 に は 「 ゆ ら ぎ 」 あ る と ふ 雁 の 棹 溝呂木信子

地球の地軸の傾きや、地軸のゆらぎが近年の気候変動をもたらしていると言われていて。あまり専門的なことはわからないが、目には見えない地球のメカニズムにより、大きな自然界が支配されていると言っても過言ではない。こうした科学力に一方で目を向けながらも、もう一方で「雁の棹」といった詩情的な言葉が出てくるところが面白い。

風 牙 えて 「 伊 八 の 波 」 に 海 の 音 小林 陽子

先日、市川市芸術文化団体協議会の研修旅行で千葉県いすみ市の行元寺を訪ねた。小林さんも参加した一人であつた。江戸時代の浮世絵師葛飾北斎に影響を与えたといわれる「波の伊八」が刻んだ欄間の彫刻は見事である。伊八は波をリアルに描くと九十九里の海岸から馬に乗って海の中に入りスケッチを重ねたとする。この欄間からも波の音が伝わってきた。〈以下略〉